

京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(5年計画の3年度目)

1. 研究課題

(和文) トラウマ経験と記憶の組織化をめぐる領域横断的研究-物語からモニュメントまで
(英文) Trans-disciplinary Studies of Organizing Traumatic Experiences and Memories:
From Narratives to Monuments

2. 研究代表者

(氏名) 田中雅一

3. 研究期間

平成 22年 4月 から 平成 27年 3月 まで

4. 研究目的 (400字程度)

トラウマの原因は、幼児のころの虐待、家庭内暴力、学校でのいじめ、暴力行為、とくに戦争での経験、犯罪や事故、自然災害などである。本研究では、トラウマをより広い意味で苦悩(suffering)や痛み(pain)とみなす。この苦悩にたいし人びとがどのような形で対峙し、克服しようとしてきたかについて考えてみたい。この過程をここでは組織化と表現する。トラウマは一般に心理学や精神医学が対象とする問題領域であるが、組織化という過程はこれらの領域にとどまるものではない。広く、カウンセリングを含む医療、芸術、宗教、司法、メディア、コミュニケーションなどの分野における研究と実践領域にまたがる。トラウマやPTSDなどの医療用語が、日常的に使われるようになって久しい。心理学や精神医学用語が普及していった理由は、わたしたちの世界が脱神学化してきたことを意味している。そのような状況でトラウマについてあえて考察することは、現代日本社会の分析にも貢献することになる。

5. 本年度の研究実施状況 (400字程度)

本年は、これまで12回の研究会をすでに行い、3月末に予定されている最終回も含めると全部で13回の研究会を実施したことになる。研究報告としては、4月9日 田中雅一「二年間の活動についてのまとめ」、葛西賢太(宗教情報センター)「アルコール関連問題をめぐるトラウマとスティグマ」、4月23日 上尾真道「トラウマ的光景：トラウマとスペクタクルをめぐる予備的考察」、5月7日 小池靖(立教大学)「セラピー文化とトラウマ」、中谷和人「開かれの技法：心身障害のある人たちの芸術実践から」、5月28日 兼清順子「平和博物館におけるトラウマへのアプローチ」、6月4日 河西瑛里子「「つながり」への希求と忌避から生まれるヒーリング：グラストンベリー女神運動にかかわる人たちを事例として」、6月18日 北岡一弘「歴史と文学・トラウマと記憶をめぐって」、7月9日 櫻村愛子(愛知大学)「トラウマと社会：恥、自閉症、自傷からみる」、10月29日 立木康介「「症状」から「障害」へ：ポストモダンの精神病理を精神分析はどう見るか」、11月26日 青木恵理子「どのようにしてトラウマは生きられたものとなるか：1960年代インドネシアにおける「共産党殲滅」の経験の語りを中心に」、12月17日 松嶋健「現在を解き放つ終末：トラウマの時間をめぐって」、1月28日 Andrea De Antoni(立命館大学)「トラウマを超える(超)能力：憑依と除霊から見える、不在のエイジェンシーと行為としての感情」、2月18日 吉

田尚史（東邦大学／早稲田大学）「カンボジア人のトラウマ経験と精神疾患概念をめぐって：カンボジア王国プノンペン市における精神科臨床の現場から」、武田龍樹「カンボジア村落部におけるポル・ポト時代の死者をめぐる人類学的研究」、3月25日 花田里欧子、小野原教子（兵庫県立大学）の計17名が報告したことになる。

研究報告に加えて、トラウマ研究に関する重要文献であるジュディス・ハーマンの『心的外傷と回復』およびアラン・ヤングの『PTSDの医療人類学』の会読も継続して行った他、6月には著者のアラン・ヤング（マッギル大学）やマリー＝ジャン・ソレ（トゥールーズ第II大学）を招聘して国際シンポジウムを開催した。さらに2月には、「悲劇のコモンズ」と題したミニシンポジウムを実施した。

6. 研究成果の概要（400字程度）

本研究会は今年度で3年目となる。当初企画していた研究内容についてほぼカバーすることができた。とくにトラウマという概念が歴史的に構築されてきたこと、また社会の「心理学化」と密接に関係していることなどが確認できた。他方で、トラウマをめぐって、記憶や忘却、理性と非合理、こころとからだなど、西欧社会において対立的に考えられてきた主要な概念が、相互に密接に関係していることも明らかになった。3年間の成果を、1) 理論的課題、2) 幼児虐待や性暴力とトラウマ、3) 少数民族とトラウマ経験、4) 歴史的事件とトラウマ経験、5) 追悼と祈念、6) 芸術と治療、7) 宗教と治療などに分けてまとめ、残りの年度でさらに考察することを確認した。

7. 共同研究会に関連した公表実績（出版、公開シンポジウム、学会分科会、電子媒体など） 2012年6月30日

国際シンポジウム「精神病理からみる現代— うつ、ひきこもり、PTSD、発達障害」（報告者：北中淳子、堀口佐知子、古橋忠晃、ニコラ・タジャン、アラン・ヤング、マリー＝ジャン・ソレ） 於 京都大学人文科学研究所

2013年2月23日

ミニシンポジウム「悲劇のコモンズ」（報告者：越智郁乃、中原聖乃、上杉健志） 於 京都大学人文科学研究所

8. 本年度の共同利用・共同研究の参加状況

区 分	機関数	受入人数		延べ人数			
		外国人	大学院生	外国人	大学院生		
学内（法人内）	6	26	3	10	220	15	100
国立大学	8	10		2	90		18
公立大学	1	1			8		
私立大学	13	16	1		98	8	
大学共同利用機関法人	1	1			8		
独立行政法人等公的研究機関	1	1			10		
民間機関	1	1			10		
外国機関	3	3	2		28	18	
その他							
計	34	59	6	12	472	41	118

研究参加者の所属機関数、参加人数、延べ人数を区分に応じて記入して下さい。

※「学内」の所属機関数は「学部数」等を記入して下さい。

※参加人数及び延べ人数の算出方法は、以下の例に基づき算出して下さい。

(例) ・1つの共同利用・共同研究課題で2人を共同研究員として3日間受け入れた(参加した場合) : 参加人数2人、延べ人数6人

9. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

(参加研究者がファーストオーサーであるものを対象)

論文数	4	
うち国際学術誌に掲載された論文数	()	()

※下段の()内には、拠点外の研究者による成果(内数)を記載。

(注) 分野の特性を踏まえて、参加研究者がファーストオーサーである場合の他に、コレスポンディングオーサーである場合や指導した大学院生がファーストオーサーになっている場合など、論文における重要な役割を果たした実績を示す必要がある場合は、その役割を明示の上で論文数を記載。

役割		
論文数		
うち国際学術誌に掲載された論文数	()	()

※下段の()内には、拠点外の研究者による成果(内数)を記載。

※ 高いインパクトファクターを持つ雑誌等に掲載された場合、その雑誌名、掲載論文数、そのうち主なものを以下に記載。

※ 拠点外の研究者については、発表者名にアンダーラインを付す。

掲載雑誌名	掲載論文数	主なもの	
		論文名	発表者名

(注) インパクトファクターを用いることが適当ではない分野等の場合は、以下に適切な指標とその理由を記載上で、掲載雑誌名等を記載。

拠点外の研究者については、発表者名にアンダーラインを付す。

インパクトファクター以外の指標とその理由			
掲載雑誌名	掲載論文数	主なもの	
		論文名	発表者名